様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２９７

研究課題名（和文）レスピーギ歌曲の深層研究

研究課題名（英文）An Exploration into the Depth of Respighi's Art Songs

研究代表者
鴨川　太郎（KAMOGAWA, Taro）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：４０５３５４７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：２０１９年に生誕１４０周年を迎え、近代イタリア音楽に巨大な足跡を残したレスピーギは、交響詩ローマ三部作の作曲家としてわが国でもつとに有名であるが、７０曲ほどある歌曲の全貌についてはまだ深い研究がなされているとは言えない。
　本研究は、主に詩と楽曲の分析によって行われたが、同時代あるいは前後の時代の他の詩作品や楽曲との関連性の中で、レスピーギ歌曲を再認識・再布置することになった。この研究は、演奏者や鑑賞者、また学習者のための、レスピーギ歌曲あるいは近代イタリア歌曲の手引書作成に役立てられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　２０世紀初頭の２０年間にほとんどのレスピーギ歌曲が作曲されているが、これらの深層を探ることによって、同時代の欧州文化あるいは古代ギリシャ・ローマ、またキリスト教世界との関係性が浮かび上がった。
　レスピーギは当時の音楽界では最先端であったドビュッシーやスクリャービンらの語法を逸早く取り込んで、当時すでに多くの国の言語に翻訳され読まれていたネグリやダンヌンツィオらの詩を用いて歌曲を作曲したことで、同時代の他の文化事象といかに深くかかわっているかが判明した。
　これらの研究で得た知見は、レスピーギ歌曲あるいは近代イタリア歌曲の今後の演奏や鑑賞に、新しい地平を切り開くものである。

研究成果の概要（英文）：The year 2019 is to mark the 140th anniversary of the birth of Ottorino Respighi who is well known as a composer of the Roman trilogy of orchestral tone poems. In Japan his Art Songs appeal to many singers for a long time, but the researches on the depth of his art songs have not been done. Approaches to the depth of the lyrics and the musical structure make their diverse cultural backgrounds clear. Especially the relation between contemporary, previous and following musical works, as much as poems, gives a new perspective on Res-pighi's Art Songs. This exploration is very useful to interpret and to appreciate Respighi's Art Songs and the Modern Italian Art Songs. Through this study it is expected to provide a new guidebook for executants, appreciators and students.

研究分野：声楽

キーワード：レスピーギ歌曲　近代イタリア歌曲　１９世紀末思想

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　2015 年秋、ヴェローナで初めてイタリア近代歌曲の国際歌唱コンクールが開催されたが、近年、1880 年前後に生まれたイタリア人作曲家の歌曲群が、日本国内はもとより、世界中で脚光を浴びるようになってきていた。しかし、「リーリカ」と総称されるこのジャンルの概説的な研究は多少あるものの、演奏家や聴取者が真に必要とする研究には至っていなかった。そこで、本研究は一般の愛好者も多く、また同世代の作曲家や次の世代にも多大な影響を与えたオットリーノ＝レスピーギの全歌曲作品について、詩や楽曲の構造分析と歴史的背景などとの関連調査を行った上で、それらの融合状態また深層を探ろうとして始められた。

(2)　本研究の開始当初、「イタリア近代歌曲」の研究は、海外の博士論文まで含めれば、わずかではあるが皆無ではなかった。しかし、これらの研究は、お決まりのように、研究者が自国語に原詩を翻訳し、楽曲については構成を図式化した程度のものばかりであった。

　本研究『レスピーギ歌曲の深層研究』は、19 世紀末から 20 世紀の半ばにかけてイタリア語による芸術歌曲（リーリカ）を書いた作曲家の中で、特に人気が高く、かつ同世代と次世代に多大な影響力を発揮したレスピーギ(Respighi,Ottorino 1879-1936)の歌曲に対象を絞って、綿密な分析と多角的な考察をしようとするものであった。

　オットリーノ＝レスピーギに関する個人史的な資料は、非常に長命であったエルサ夫人の詳細な著述が、原資料として 1970 年に上梓されていた（Respighi,Elsa:“ Ottorino Respighi, dati biografici ordinate ”Milano,Ricordi,1970.）。その後、没後 50 年を記念して、レスピーギの多岐に亘る作品全体を概説する著作の刊行が相次いだ（Cantù,A.:“ Respighi compositore. ”Torino,Eda,1985;a cura di Rostirolla,G.:“ Ottorino Respighi ” Torino,Eri,1985.; Alverà,P.:“ Respighi ”New York, Treves Publishing Company,1986.）。このうち、P.アルヴェラのものは画像資料をふんだんに取り込んでいて、歴史的背景に対する示唆に富んでいた。また、A.カントゥの著作には、付録として P.ペダッラが調査した手稿譜の所在地が、G.ロスティロッラのそれには、ペダッラが整理したレスピーギ作品の総目録が載っており、レスピーギの作品は作曲された順に「ペダッラ番号」とでもいうべき通し番号が振られていた。2008 年には、ヴェネツィアの G.チーニ財団に移譲されていたレスピーギの自筆譜や記録文書がアーカイヴ化され DVD として発行された。

　上記に見るように、本研究開始当初から研究対象となるレスピーギの歌曲については、制作年代が確定され、出版譜との異同が調査されるべき自筆譜の所在地が明確になっていた上に、それらを生み出した当時の作曲者の心理や環境、また社会情勢などに言及する文献もある程度揃っていた。

２．研究の目的

(1)　20 年以上も前のことになるが、筆者は博士論文『《ドン＝パスクワーレ》の解体＝構築（デコンストラクション）』において既に、詩の分析と楽曲分析を併記してオペラや歌曲の研究とすることを良しとしない立場をとっている。

　問題は、演奏家が実際に演奏するときに、詩の韻律を考えていては音楽の要求に逆らってしまうことが多々あるということと、楽曲の構成を把握していたとしても、内実の伴った演奏ができるわけではないということである。演奏にとって重要なのは、詩と音楽が結びつくことによって、それぞれが個別に存在する時とは違う世界を現出するのだという視座である。

　詩と音楽に別個の透徹した分析を加え、それぞれの深い読みの中から、いかに演奏されるべきかを科学的に導き出すことが、本研究の目的である。

(2)　前項に挙げた目的は、声楽家やその伴奏者が聴衆を前にしてステージ上で演奏する、その時までに行っておくべき知的作業であるといってもよいだろう。本研究の遂行とその公開を願ったそもそものきっかけは、このような作業過程を踏まえずに演奏する日本の演奏者やその卵たちを多く目の当たりにしてきたためである。東京藝術大学音楽学部、昭和音楽大学、北海道教育大学等で声楽指導に 20 年近く携わってきた者として、これは甚だ遺憾である。

　毎年毎年、音楽大学や教員養成系大学で声楽を学ぶ日本の若者は大勢いるものの、レッスンで学ぶ教材が旧態依然として何十年も変わらないというのも、教員側の怠慢ではないか。目新しく優れた教材に対して新しい指南書を世に出すための基礎研究とすることも、本研究の目的である。

３．研究の方法

(1)　本研究はレスピーギの歌曲について、既存の研究成果を援用しながらも、詩と音楽の融合によって新たに生み出される意味作用を記述するものである。

　詩と音楽を分離して分析することは作品解釈の上で必要不可欠ではある。しかし、例えば詩を分析するにあたって、イタリア語の詩を単に連辞的に捉えるだけでは詩の妙味を完全に理解したことにはならず、時には範列的に捉えたり、「特定共時態におけるコノテーション」すなわち 19 世紀末イタリアという環境の中で、言外に含まれるニュアンスや意味を眺め直したりすることも必要であった。また、象徴主義的な詩の場合には、古代ギリシャ・ローマ、あるいは聖書の物語などとの照応を調査することも強いられる。

(2)　音楽を分析するにあたっても、音楽の３要素といわれる「旋律・律動・和声」を部分的に捉えた後に、作曲家が記した「速度記号・強弱記号・発想記号」などを手掛かりに、音楽自体がもつエネルギーの推移などにも着目していかなければならなかった。
　レスピーギの音楽に関しては、ワーグナーやドビュッシーの影響は言わずもがなであるが、リムスキー＝コルサコフやプッチーニの作品からの影響も見逃せない。重要なことは、詩も音楽も「間テクスト性」を孕んでいるという視座を見失わないようにすることである。

(3)　手元にない対象作品の楽譜を入手することから始めたが、殆どのものは出版譜として入手済みであった。しかしながら、絶版となっているものや、もともと未出版の手稿譜しかないようなものは、それらを所管する古文書館などに出向いて閲覧した。
　また、レスピーギや各詩人たちのゆかりの地を実際に巡検することで、書物やインターネットからでは得られない多くの情報を獲得するよう努めた。

４．研究成果
(1)　レスピーギ 1879-1936 が自作歌曲の詩として選定したのは、G.ボッカッチョ 1313-1375 や P.B.シェリー 1792-1822 らを除くと、G.ダンヌンツィオ 1866-1942、A.ネグリ 1870-1945 を中心とするレスピーギと同時代の詩人のものである。イタリア語の詩が圧倒的に多いが、フランス語のものもあり、インド人(R.タゴール 1861-1941)やアルメニア人(C.ザリアン 1885-1969)の詩を伊訳して使っている場合も散見される。
　レスピーギが選んだ同時代の詩人たちは、大抵の場合、当時から国際的に評価され、その作品が相当量一般に流布していた（招待講演「レスピーギ歌曲における文学的志向と音楽語法の変遷」二期会イタリア歌曲研究会、2018)。

(2)　作曲家が時代に敏感であることは言わずもがなであるが、ある意味で時代の鏡となるような詩に刺激を受けて、レスピーギは約 70 曲の芸術歌曲（リーリカ）を作曲したと言える。
　『海潮音』(1905)など上田敏の訳詩で、高踏派や象徴派と呼ばれる同時期の欧州詩の一部は日本にも紹介され後々多大の影響を与えた。上田敏の没後発行された訳詩の遺稿集にも『牧羊神』(1920) なる題名が付されているが、その牧羊神を扱った芸術歌曲集《森の神々》をレスピーギが作曲したのは 1917 年である。
　現在に至るまで、《森の神々》はわが国で刊行されてきた楽譜の中にも含まれず、その深層が詳らかになっていなかった。そこで些か難解と思われるこの歌曲集を取り上げ、その深層を探って論述したものが、拙著『レスピーギ歌曲の深層研究―レスピーギ作曲《森の神々Deità silvane》の考察１，２―』である。

(3)　上記論文の『レスピーギ歌曲の深層研究―レスピーギ作曲《森の神々Deità silvane》の考察１―』(以下、『１』と略記)では、《森の神々》の作詩者 A.ルビーノ 1880-1964 の詩を綿密に分析した。また、サンレーモの市立博物館にて、大部のルビーノに関する研究書(CASSINI,Marco,*“Antologia-Antonio Rubino e l’amore per la Liguria”*,2013)を購入し、マリッティメ・アルプスの一角にあるバイアルド村の終の棲家も訪れた。これら研究出張の内容は、2018 年、二期会イタリア歌曲研究会で「レスピーギ歌曲の歌唱実践」と題して発表している。

(4)　前出論文『１』における詩の分析を進める中で、ギリシャ・ローマ神話との関係性、旧約聖書との関係性、F.フーケ―の『ウンディーネ』(1811)、S.マラルメの『半獣神の午後』(1876)、ダンヌンツィオの『新しき歌』(1882)などとの関係性、また、S.ボッティチェッリの〈春〉(1477～1482)や J.E.ミレイの〈オフィーリア〉(1851～1852)など、絵画のイメージとの関連性についても論じた。そのことにより、ルビーノの詩はまさに「開かれたテクスト」となり、内に孕んだ豊穣なる世界が立ち現れた。

(5)『レスピーギ歌曲の深層研究―レスピーギ作曲《森の神々Deità silvane》の考察２―』においては、詩の広がりを認識したうえで、音楽との融合状態を検証した。
　それに先立って、レスピーギの自筆譜を確認すると、彼にとっての新しい和声語法である「4 度堆積和音」を用いたコラール風な習作が残されていることを発見し、このことを手掛かりに楽曲分析を進めた。
　また、音楽に関しても「開かれたテクスト」として検証する中で、C.ドビュッシーの《前奏曲集 第１巻》との関係性、A.スクリャービンの「神秘和声」との関係性、またレスピーギ自身の後続作品である交響詩《ローマの松》との関連性などが浮かび上がった。これは重要な発見といえるだろう。

(7)　二期会イタリア歌曲研究会での 4 回に亘る講演では、レスピーギ歌曲をほぼ全曲網羅して、解説または演奏指導を行った。

(8)　前出の２本の論文に加え、本研究の成果発表となる３本目の論文を 2019 年度内に北海道教育大学紀要で公表する予定である。また、演奏実践につながる成果発表として、2019 年 9 月 29 日(日)午後 2 時より、東京・南九段にあるイタリア文化会館アニェッリホールにて、第 55 回・二期会イタリア歌曲研究会・定期公演「レスピーギ歌曲の世界」を監修・企画構成し、実演も行うことが決定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 鴨川 太郎、レスピーギ歌曲の深層研究―レスピーギ作曲《森の神々Deità silvane》の考察２―、北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）、査読無、第７０巻、第１号、2019、印刷中

② 鴨川 太郎、レスピーギ歌曲の深層研究―レスピーギ作曲《森の神々*Deità silvane*》の考察１―、北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）、査読無、第６９巻、第１号、2018、97-111

〔学会発表〕（計４件）

① 鴨川 太郎、レスピーギ歌曲(1909～1919)の研究、二期会イタリア歌曲研究会、2019

② 鴨川 太郎、レスピーギ歌曲の歌唱実践、二期会イタリア歌曲研究会、2018

③ 鴨川 太郎、レスピーギ歌曲における文学的志向と音楽語法の変遷、二期会イタリア歌曲研究会、2018

④ 鴨川 太郎、レスピーギとダンヌンツィオを巡って、二期会イタリア歌曲研究会、2018

６．研究組織

(1)研究分担者なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ルチアーナ　ギッツォーニ

ローマ字氏名：GHIZZONI, luciana

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。